

## 8. 西保地区の出産について

井 熊 志 保

1. はじめに
2. 伝統的な出産
3. 変化とその要因
4. おわりに

### 1. はじめに

今回の調査実習で、私は西保地区の伝統的な出産についてのお話を聞く機会が多かった。家庭での分娩の仕方や、赤ん坊をお披露目する儀礼としての「孫ゆりげ」などについてである。このお話は、私にとってとても新鮮であった。また、昭和 40 年（1965 年）ごろを境に、お嫁さんが嫁ぎ先から実家に戻りそこで出産するという出産のあり方は、病院などでの施設分娩へと変わり、それまで行われていた儀礼の多くも時代の変化とともに行われなくなっていく、ということもお聞きした。これらのことを調査の中で知るにつれ、私は家庭での出産がどのようなものだったのだろうか、またなぜそのような変化が起こってきたのだろうか、ということに興味を持ち、詳しく調べてみたいと思うようになった。

また、赤ん坊は最初は歩くことも話すこともできないが、成長すれば学問をしたり働いたりしてこの社会を支える存在になっていく。私は西保地区におけるその出発点を、人間がどのように生まれこの社会に受け入れられていくのかを見てみたいという問題意識もあり、この「出産」をテーマに選んだ。

以下では、2 節で昭和 40 年ごろまでの西保地区の伝統的な出産について記述し、3 節で現在の出産を記述したのち、変化の要因について考察していきたい。なお、「伝統的な出産」に関しては、お話を伺った方との関係で昭和初期ごろに行われていたものを記述する。変化の要因に関しては家庭分娩から施設分娩への変化に重点をおき、見ていきたい。

### 2. 伝統的な出産

#### 2-1. 出産前

お嫁さんは妊娠すると嫁ぎ先から実家に戻り、そこで出産していた。これは、「嫁ぎ先で産むのは

気の毒だ（気兼ねする）」というのが大きな理由のようだ。実家でならば、気兼ねなくのびのびと産めるということなのだろう。しかし、第2子からは嫁ぎ先で産んでしまう人もいたそうだ。

百姓の家に嫁いだ場合には、農繁期は子供が生まれる直前まで働き、陣痛が始まってから実家に戻っていた。これについてFさん（70歳代、女性）は「夫や姑さんから仕事せい、仕事せいと言われるから」だとおっしゃっていた。また、嫁ぎ先と実家が近いということもあって産気づいても、すぐ実家に戻れるからでもある。Fさんは12月いっぱいまでまき集めをしていて、実家に戻ったのは1月1日、2日に子供を産んだのだそうだ。このように子供が生まれる前日まで仕事をして忙しく動き回っているというのは私にとっては信じられないことだが、当時は「おなかが痛くなってきたから戻る」のが珍しいことではなく、ごく当たり前のことだったそうである。驚くことに、農作業中に山道で産気づき、家のふすまを担架の代わりにして実家まで運ばれた人もいるほどだ。一方で、一ヶ月程度前から実家に戻っていることもあったという。

子供が産まれるまでは、実家で親と一緒に納戸（なんど）と呼ばれる部屋で眠り、食事もお産前だからといって何か特別なものを食べたり飲んだりするわけではない。普段と同じ麦ご飯と大根の味噌汁などだ。

## 2-2. 出産

子供を取り上げるのは主にお嫁さんの母親や、「まごばあちゃん」と呼ばれる生まれる子のひいおばあちゃん、つまりお嫁さんの祖母である。取り上げるやり方は、母から子へと代々引き継がれていたのだ。

また、昔は大沢に産婆さんがいて、西保地区の中でも大沢に住んでいる方は産婆さんに子供を取り上げてもらうことが多かったそうである。さらに西二又や上山に住んでいる人の中には、門前町の浦上にいた産婆さんにかかる方もいたそうだ。（産婆さんにかかる場合には、妊娠時に2ヶ月に1回程度産婆さんのところまで歩いて行き、検診を受けることもあった。同じ年頃の妊婦さん何人かで連れ添っていくこともあったそうである。）主に難産の時には産婆さんに来てもらっていた。妊婦が産気づくと家族の誰かが産婆さんの家に迎えに行き連れて帰ってきたのだ。このとき上山から大沢に行く場合には、1時間近く歩いて山を越え、また歩いて戻ってきたのだそうである。私は試しに上大沢から大沢まで歩いてみたのだが、勾配が激しく大変であった。今のようにまったく道路が整備されていない時代に、上山から大沢まで歩いて移動したとは、驚きである。

出産は納戸でするのが、仰向けに寝て産む（いわゆる仰臥位分娩）今と違って、座って産む「坐産」であった。着物を着たまゝ出産し、赤ちゃんが産まれるとまず母と子をつなぐへその緒を切る。竹の皮をはがし、それを削ってナイフのようにしたものを熱湯をかけたり火であぶったりして殺菌し、血の出ないところを切るのである。竹の皮を使うのは、ばい菌が入らないようにするためだ。しかし産婆さんは竹ではなく専用のはさみを使って切ったそうだ。へその緒はたいいてい赤ん坊を取り上げた人が切るのだが、5、6人子供を産んで慣れている人は自分で切ったりもしていたらしい。母は強し、

といった感じである。(切ったへその緒は、今のようにとっておいたりせず、即捨ててしまった。) そして木でできた大きなタライにお湯を沸かして赤ん坊を洗う。赤ん坊をお風呂に入れるのは、産まれた時と3日目、10日目だったそうだ。

### 2-3. 産後

産後1〜2ヶ月は、母子はそのまま実家で過ごす。その間お嫁さんは赤ん坊の下着やおしめ、着物を縫ったりしていて、割と忙しいそうだ。産後1週間くらいは、「頭に血が上る」というので寝るとき以外は横にならずに座ってすごすという。また、後産(あとざん)がおきるまでは麻の糸で足の付け根あたりをしばっていたそうだ。これは、胎盤が戻っていかないようにして無事に後産をするためだったという。

産後1週間ぐらいすると、お嫁さんは必ず「こやだご」というものを納戸で食べた。これは米の粉を石臼でひいて丸めて団子にし、それを味噌をといた汁に入れたもので、母親が作ってくれる。要するに米粉団子の入った味噌汁だ。これは2人目、3人目を産んだ後も必ず食べたという。食べると母乳が出るようになって言われていたのだ。「こやだご」という名前の由来は、子供を産む部屋を「小屋場(こやば)」といい、そこで食べるからだそうだ。「だご」はだんごのこと。他にも、レンコンをすりおろして味噌汁に入れて食べると母乳が出る、とも言われていた。逆に食べてはいけないもの、タブーは、塩なす・おそば・ウメである。体が冷えたり母乳が出なくなったりすることをかなり気にしていたようだ。

さらに、産後1週間は、母子ともに家族の皆が居るところには顔を出してはいけなかった。元気であったとしても、だ。例えば皆が集まる居間などは避けて移動していたのだそうだ。食事やトイレに行くときなどかなり不便だと思うが、「お産をしたら、けがらわしい」という考えがあったからである。この1週間は料理もしてはならず、ずっと納戸で過ごすそうである。

旦那さんが1週間か10日ぐらいしてから実家に様子を見にくることも稀にあるが、ほとんどの場合は見に来なかった。昔は男が見に行くのは、「あたいがない(気が弱い)」と思われていたという。親戚(女性)はお見舞いで果物やもち米を持ってくることもあった。お嫁さんが実家に戻っている間、旦那さんは普通に仕事をしていたそうである。お嫁さんや生まれたばかりの子供の顔を1〜2ヶ月も見られないのでさぞ気がかりなのではないかと思いきや、意外と「心配にはならない」のだそうだ。それだけ出産や子供の世話は女の仕事、という考えが根強かったということだろう。

産後1、2ヶ月すると、お嫁さんの母親(または兄弟)が、娘と孫を嫁ぎ先へ送っていった。送ったら、母親はすぐ実家に帰ってしまうのだという。このとき、親戚に子供が生まれた挨拶として、物を持って行って配った。紅白饅頭・お神酒・赤飯・お餅などである。これは「孫ゆりげ」(4参照)のときにもらった産着・着物のお返しとして、そのときに配るという話もあった。

## 2.4. 「孫ゆり（る）げ」

「孫ひろげ」、「孫渡し」とも呼ばれていた。嫁ぎ先に戻ってきて1週間～1ヶ月くらいすると、親戚や部落の人を集めて生まれた子供のお披露目をおこなう。これが「孫ゆりげ」である。「ゆりげする」というのは「お披露目する」という意味の方言だ。子供が生まれたお祝い、としての意味合いが強かったそうである。

呼ばれるのは大体15人～40人程度で、結婚式で祝い金を持っていった人が呼ばれるという話もあった。また、招待されるのは皆女性で、男性は参加しないのだそうだ。なんと旦那さんも参加しなかったという。これも、出産や子供のことに限っては、「男は関係ない、女の仕事だ」という考えがあったからだ。

集まった親戚は、皆赤ん坊に着せる服の生地やもち米（主に西二又・上山の習慣）を持ってきた。生地の長さは8尺（約2.4メートル）で、ちょうど1枚の着物が作れる分である。そしてもらった生地でお嫁さんは赤ん坊の産着を作るのだ。もち米は「（血が）濃い」親戚か「薄い」親戚かで持ってくる米の量が違って、だいたい5升（約9.0リットル）～2升（約3.7リットル）の間で持ってきたという。そのもち米はおこわなどにして後で食べたのだそうだ。（大沢や上大沢ではあまり農業をやっていなかったのも、もち米は持ってこなかったそうである。）お金（300円～500円）をもってきたという話もある。そして仏壇のほうから、「濃い」親戚ほど上座に、「薄い」親戚ほど下座に座っていく。産婆さんにかかった場合は、産婆さんが一番上座に座るのだそうだ。お嫁さんや姑さんなどは一番下座である。料理を運ぶだけで、「ゆりげ」に出ない場合もあるらしい。料理も一緒には食わず、親戚が帰ったあとに食べたという。

「ゆりげ」はお昼時に行ない、1人1人にお昼ご飯として御膳を出した。料理を作るのは主に姑さんとお嫁さんだが、親戚の人2、3人で用意する場合もあった。出す料理はこれといって決まっているものはないが、だいたいはお赤飯、にしめ（煮物）、刺身、豆腐...などだ。豆腐は自家製のもので、昔はこれがごちそうだったという。刺身もタコだったり魚だったり家庭によって様々である。紅白饅頭を2段に重ねておいておく、という家もあった。そして親戚が全員集まったところで、料理を食べ始める。特に赤ん坊がここでご飯を食べることを、「100日の1口食い」といったそうだ。この名前の由来ははっきりとはわからないが、おそらく生まれてから100日目頃に赤ん坊が初めて母乳以外のご飯を口にするからではない

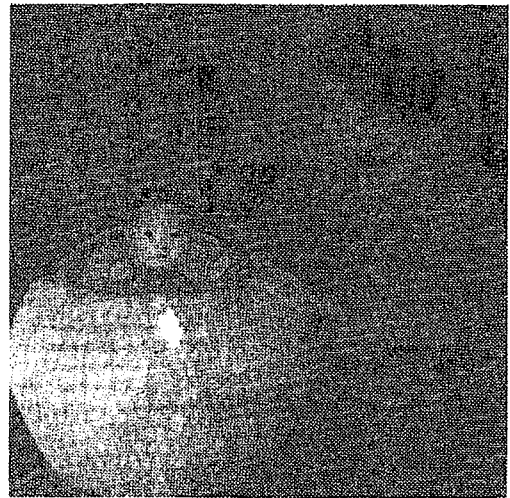


写真1 ツブラに入れて育てられる幼児  
（毎日新聞社編／発行 『能登半島』より）

か、と推測される。

このとき主役の赤ん坊は、「ツブラ」の中に入れられている。この「ツブラ」とは、わらで編んだかごのようなものである。<sup>1)</sup> 赤ん坊は「ツブラ」の底に、「わらすべ」（わらの根元の柔らかい部分をほぐしたもの）を敷いて入れられ、古着を何重にも重ねて固定され動けないようになっていた。そして顔だけを出した状態の赤ん坊を、親戚の人が見ていったのだという。この「ツブラ」は、その集落で作れる人に作ってもらっていた。ほとんどの家で、誰かしら作れる人がいたという。お嫁さんの父親であったり、旦那さんの父親であったり。代々作り方が伝えられていたのだ。また、「ツブラ」の中に丸い竹をしいておくこともあった。この竹を揺らすと、泣き出した赤ん坊が自然と泣き止むのだそうだ。（「ゆりげ」が終わった後も、赤ん坊は3ヶ月程度「ツブラ」に入れておかれる。これはお嫁さんが畑仕事などで忙しくておぶってられないので、赤ん坊が勝手に動き回らないようにするためだった。「ツブラ」に入れられている間、赤ん坊はここで排泄もしたのだという。）

「ゆりげ」はだいたい2時間程度で終わり、料理を食べ終わったらお開きとなる。その後は、それぞれ自由に世間話などをし、だんだんと帰っていく。

「ゆりげ」は旦那さんの家でやったあと、お嫁さんの実家でお嫁さんの方の親戚を集めてやる場合もあったし、両方の親戚を集めて一度にやってしまう場合もあった。また、「ゆりげ」をやるのは第1子のときだけで、第2子からはやらないのだそうだ。

以上、西保地区での伝統的な出産とそれに関係する儀礼を見てきた。そこには、出産についての昔からの考えが貫かれているのがわかる。お話を聞く中で、特に「出産は女性のこと」、また「子供を産んだ後はけがらわしい」という意識が強いように感じた。しかしこのような考えも、そして出産のあり方それ自身も、時代とともに変容していくのである。

### 3. 変化とその要因

#### 3-1. 現在の出産

2節で見てきたような伝統的な出産やそれに関する儀礼の多くは、今ではほとんど行われていない。以下、伝統的な出産と現在の出産との違い・受け継がれているものを、具体的に見ていくことにする。

現在、西保地区では、病院で出産する人がほとんどで、自宅でする人はもういない。これが伝統的な出産との最も大きな違いといっていいだろう。今は主に輪島、門前、穴水などの病院へ自家用車で行くのが一般的である。病院に行くのは生まれる1ヶ月〜1日前で、人によって差がある。また、病院での出産には旦那さんが立ち会うこともしばしばである。生まれた後も旦那さんは何度か様子を見るために通って来るのだそうだ。これは、「出産は女性のこと」という考え方がだんだんと変わってきていることの表れだと思われる。それから、昔は捨てていたへその緒。これは現在では病院の方が箱に入れて渡してくれる。へその緒をとっておくのは、病院での分娩が行われるようになってからできた習慣なのではないだろうか。

病院を退院した後、お嫁さんは実家にもどる。そこでたいてい約1ヶ月を過ごすのだそうだ。長い人で3ヶ月間戻っていることもある。実家ではお嫁さんは家事をせず、母親がするそうである。これは昔のように「けがらわしい」からというのではなく、「水に触ると冷えてしまう」からということだ。体が冷えるのを気かけるところは今も変わっていない。また、嫁ぎ先へ戻ればまたすぐ忙しく働かなければならないので、実家で安静にして体調を元に戻すという点が、今は重視されているようだ。実家にいる間は、白玉だんごを入れた味噌汁を食べる。これは母乳を出やすくするために、現代版の「こやだご」といったところだろうか。他にもレンコンの味噌汁を食べるなど、産後に食べるべき物には昔からの名残が少し残っているようだ。

子供が生まれると、親戚などはお祝いを渡す。ごく親しい人は病院まで来て渡すそうである。お祝いは昔のように着物のきれなどではなく、ほとんど現金だそうである。着物を贈るにしてもそれぞれ好みがあるから、ということらしい。

約1ヵ月後、実家から嫁ぎ先へ戻るときには家族の人が送ってくれる。このとき実家からは赤ちゃんの着物、男の子の場合はかぶと、女の子の場合は雛人形を持ってくるという話もある。そして嫁ぎ先へ戻ると、親戚やお祝いをもらった家にお返しとして物を配る。おまんじゅうや、時にはロールケーキを配ったりもするそうだ。このような風習がなくなり、今では物を配ったりすることを全くしていない家もある。

赤ん坊を親戚にお披露目するための「孫ゆりげ」は現在行われていない。家庭分娩でなくなってからは次第にやらなくなっていったそうだ。今は盛大なお祝いはせず、親戚も呼ばないのだという。また現在では、生まれてから100日たつと「100日参り」というのをやる。赤ちゃんは100日たつと首が据わるので、そのお祝いにお宮参りをするのだそうだ。この「100日参り」のときに、実家から持ってきた着物を赤ちゃんに着せる。この着物には紐がついていて、お嫁さんが肩にかけると抱っこできるよになっている。(この着物は、七五三のときには紐を切って子供に着せるのだそうだ)

### 3-2. 変化の要因の考察

このように、伝統的な出産は時代とともに、大きくは家庭分娩から病院などでの施設分娩へと変わってきている。現在行われている出産についての話をしてくださった、ある若い女性は、私が昔の儀礼や出産についての考え方を紹介すると、「そんなことやっていたの?!」ととてもびっくりされていた。それほど今の出産のあり方は、昔と大きく変わってきているのだと私は調査の中で実感した。では、その変化の要因はなんであったのだろうか。「いつごろから病院で産むのが一般的になったのか」という質問に対して、今回話をお聞きした方のほとんどが「昭和40年(1965年)ごろからではないか」とお答えになっていた。この昭和40年(1965年)ごろには、いったい何があったのだろうか。ここでは以下の4つの点について考察してみたい。

1つは家庭に代わる出産場所としての施設、つまり病院(産婦人科)の創立という点である。施設分娩の場合、西保地区のたいていの人が利用していたのは、輪島市にある輪島病院であるが、この病

院は昭和 20 年（1945 年）に「日本医療団輪島病院」として診療を開始した。この病院に産婦人科ができたのが何年であるのかは、残念ながら現在資料が残っていないらしく正確にはわからない。ただ、問い合わせてみたところ「昭和 45 年（1970 年）にはすでにあった」ということだったので、昭和 20 年（1945 年）～45 年（1970 年）の間に開設されたのだろう。これによって、それまで家庭分娩が当たり前だった西保地区の住民は、「病院での医師による分娩」という選択肢を得たのである。

2 つ目には交通の便、つまり道路の建設や交通手段という点である。『図説 輪島の歴史 市制施行五〇周年記念』によれば、西保地区は昭和 35 年（1960 年）ごろまでは「陸の孤島」とよばれるほど交通の便が悪かった。しかし西保村が昭和 29 年（1954 年）に輪島市に合併されて以降、だんだんと輪島からの道路ができてきた。そして昭和 36 年（1961 年）、輪島から大沢までのバス道路が完成し、翌年の昭和 37 年（1962 年）、開通したのだという。さらにこれに加えて、昭和 40 年（1965 年）頃には一般の家庭に自家用車が普及したのだ。このことによって、これまでは大人でも半日かかった輪島に、西保地区からも行きやすくなったのは間違いない。病院で出産するようになった条件の一つとして、輪島への道路の建設や自家用車の普及などの交通の便に関することがあると考えられる。

3 つ目には、門前における産婆のあり方の変化があるのではないかと。西保地区の中でも西二又や上山に住んでいた人たちは、門前町にいた産婆さんにかかることがあった。ところが門前町では昭和 39 年（1964 年）に町立の母子健康センター<sup>2)</sup>が開設され、門前の産婆（助産婦）たちはほとんどがここに勤務することになった。そこで門前町の助産婦会では「家庭分娩は扱わない」という会則を作ってしまったのだ（西川 1997:252）。これによって、それまでのように難産の時に門前の産婆さんに来てもらい出産を手伝ってもらう、ということができなくなってしまった。住民は難産の時には、ハタ、と困ることになったのである。

4 つ目は、これらの変わりゆく外部の諸条件を受けて、住民自身の意識にも変化があったという点だ。外側の条件がいくらそろっても、それまで家庭で出産しそれを当然だと考えてきた人たちは、すぐには「病院で産もう」とはならないはずだからである。「なぜ病院で産むようになったのか」という質問に対して、K さん（70 歳代、女性）からは「やっぱり病院のほうが安全だし安心して産めるからではないか」という答えが返ってきた。昭和 40 年以前にも、稀ではあるが、難産の時には病院へ行くこともあった。また、出産中に大量に出血して子供が亡くなってしまうこともあったそうである。家庭での分娩は、さまざまな事態（例えば逆子だったり、へその緒が首に絡まったり、など）に対応しきれず母子を危険にさらす可能性がある、という相応のリスクを負っていたのである。するとやはり、資格を持ち知識もある医師がいる病院での分娩のほうが安心だと、住民は思うようになっていったと考えられる。

#### 4. おわりに

この章では、西保地区における昔と今の出産について、変化の要因などについて述べてきた。考察

を通して感じたことは、日本全体の変化とともに、西保における出産のあり方が変わってきたのだということだ。西川麦子著『ある近代産婆の物語 能登・竹島みいの語りより』によれば、日本全国の出産は、昭和30年（1955年）代に入ると施設分娩が急増した。昭和35年（1960年）には、施設分娩が50.1%、家庭分娩が49.9%となり、その後日本は急速に「施設分娩時代」に入ってしまった。しかし、農村や漁村では、昭和35年（1960年）現在ではまだ73%が家庭分娩であり、施設分娩が過半数に達したのは、昭和40年（1965年）である。こうした郡部の状況にたいして、「保健所や分娩施設から遠隔の地にある農山村地区に、安全かつ衛生的な施設分娩の促進と日々の保健指導を行う」ために母子健康センターの整備補助事業が全国で始められた。（西川 1997:252-253）この政府・厚生省（当時）の動きを受けて農山村でも母子健康センターが設立され、施設分娩が一般化したのだ。このような全国的な家庭分娩から施設分娩への流れの中で、西保地区でも変化が起こってきたのである。なお、この変化に伴って、「孫ゆりげ」などの儀礼が行われなくなっていったのが何故なのかについては、更なる考察が必要であったと思うのだが、聞き取り不足・調査不足でそれができず残念である。

今回、私自身本格的な聞き取り調査をするのは初めてで、あらゆることが緊張の連続で戸惑うことが多々あった。私は聞き取りの中で、なるべく丁寧に出産や儀礼のやり方・その意味を聞こう、西保の方々の出産に対する考え方・意識の変化をつかもう、と心がけたつもりであったが、書いてみるとやはり曖昧な点や不確かな点が残し、十分に記述・考察できたとはとても言えない。それは今後の教訓としたい。ただ、救われたのは、西保の方々がとても親切で、こちらのぶしつけな質問にも丁寧に答えてくださったことだ。不慣れな調査に協力していただいて、本当に有難く、感謝している。

## 注

- <sup>1)</sup> 芳井先一編『石川県大百科事典』によれば、赤ん坊を入れて育てるためのこのかごは、石川県内で広く使われていた民具である。能登地方では「ツブラ」、加賀地方では、「イズミ」と呼ばれていた。
- <sup>2)</sup> 母子健康センターは、保健指導と助産を目的としているが、施設内分娩の普及を図るために当初は、医療施設の不足している群部を中心に、助産施設として設置された。（厚生省五〇年史編集委員会編 1988: 1656）